

徳之島伊仙方言文法概説

加藤 幹治

A sketch grammar of the Tokunoshima Isen dialect

KATO Kanji

Abstract

The Isen dialect is a subgroup of the Amami language, which is endangered. The present study clarified the comprehensive system of the Isen dialect from the viewpoint of descriptive linguistics. Section 2 discussed phonology (segmental phonology and indices of phonemes, syllable structure, and the system of word accent) of the dialect. Section 3 defined word classes and root classes by using morphosyntactic characteristics. Section 4 discussed internal and external structures of verbal predicate including words with an adjective root. Section 5 discussed morphosyntax of noun and nominal predicate. Section 6 discussed the demonstratives. Demonstratives in the Isen dialect is a cross-over category. Section 7 discussed syntax (word order, valency-changing operation, and subordinate clause). Section 8 discussed functional categories.



目次

1	言語の概要	213	7	統語論	223
1.1	どのような言語か	213	7.1	語順	223
1.2	地理・系統	213	7.2	結合価と格配列の操作	223
1.3	危機の度合い	213	7.2.1	態転換	223
1.4	先行研究	213	7.2.2	助動詞	224
2	音韻論	213	7.3	従属節	224
2.1	分節音	213	8	文の機能	225
2.2	音節構造	214	8.1	極性	225
2.3	名詞アクセント	214	8.2	疑問	225
3	語・語根の分類	215	8.3	相	226
3.1	品詞分類 (語の分類)	215	8.4	法	226
3.1.1	動詞	215	略号一覧: 1=一人称, 2=二人称, ABL=奪格, ADN=連体形, ASPL=疑似複数, AUG=指大辞, BAR=ハダカ形, CAUS=使役, COND=条件, COP=繫辞, DAT1=与格 1, DAT3=与格 3, DIM=指小辞, FUS=融合形, IMP=命令, INF=不定形, INS=具格, LOC1=処格 1, NCOND=否定条件, NEG=否定, NOM1=主格 1, NOM2=主格 2, PASS=受身, PN=固有名, POT=可能, PROG=継続, PST=過去, Q=疑問, QUOT=引用, SEQ=中止形, SG=単数, TOP=主題, UMRK=無標, VBLZ=動詞化.		
3.1.2	名詞	216			
3.1.3	連体詞	216			
3.1.4	副詞	217			
3.1.5	助詞	217			
3.2	語根の分類	217			
4	動詞	217	はじめに		
4.1	動詞の内部構造	217	本研究が扱うのは、奄美語徳之島方言のうち、徳之島南部の伊仙町で行われる方言 (以下、伊仙方言) である。本研究では伊仙方言の音韻論、形態論、統語論の体系の概略を記述する。		
4.1.1	動詞語根からなる動詞	217	本稿では、伊仙方言の例文にインターリニアなグロスを付して示す際、一段目に伊仙方言の基底形を、二段目に日本語と略号によるグロスを、三段目に日本語訳を示す。		
4.1.2	形容語根からなる動詞	219			
4.2	助動詞	219			
5	名詞	220			
5.1	代名詞	220			
5.2	格	221			
5.2.1	主格の交替	221			
5.2.2	主要項の配列	221			
5.3	名詞述語文	222			
6	その他の語類	222			
6.1	指示詞	222			
6.2	疑問詞	222			

1 言語の概要

1.1 どのような言語か

はじめに伊仙方言の構造を簡単に述べる。基本の語順はSOVであるが、談話ではSOが出現しないことも多い。自動詞主語と他動詞主語に有形の標示がなされ他動詞目的語は無標示である、有標主格型の言語である。形態法から見るといわゆる膠着語であって、動詞・形容詞の語根に接辞が連なった本動詞と助動詞の複合体によって述部を形成する。名詞の形態法は動詞類に比べ貧弱であるが、名詞に後接する助詞によって格が標示される。また、名詞句の標示は情報構造に敏感であり、格助詞・とりたて助詞が情報構造を示す役割を担う。音韻論から見ると、開音節が中心であるが、閉音節も限られた環境で出現する。また、ピッチアクセント言語であり、それぞれの語彙が弁別的なアクセント型を指定されている。

1.2 地理・系統

伊仙町は南部で珊瑚礁のある海に面し、北東部で山に面する。また、赤土の平地が多く、農業が盛んである。徳之島で唯一島外と往来する交通拠点のない町である。かつては川や崖によって集落間の移動が制限されていたため、集落同士の方言差が残存している。

系統的には、日琉語族・琉球語族・北琉球語群・奄美語に属する(上村 1997, Pellard 2015, 中本 1984)。管見の限り、奄美語の他方言との系統的關係に関しては定説が存在しない。伊仙方言の徳之島方言内における類型論的位置付けに言及した研究には、北西・東・南の3群のうち南群に属するとするもの(崎村 1983)と、北・南の2群のうち南群に属するとするもの(平山 1966)がある。

1.3 危機の度合い

管見の限り、伊仙方言のほぼ全ての話者が日本語との多言語話者である。特に、共通語、近

畿方言⁵、鹿児島方言⁶の影響が強い。筆者の現地調査の協力者に限ると、70代以上の話者同士の会話はほぼ伝統的な伊仙方言で行われるようである。50代より若い住民は、伊仙方言による会話を聴解することができるが、日常的な会話や公的な場所での使用言語では日本語への遷移が顕著である。

伊仙町では、有志の話者によって日本語なしで会話する会合が設けられることがあるが、それによって若年層が流暢に伊仙方言を運用するようになるといった影響は今の所ないようである。

従って、話者数が限られるとともに若年層への目立った継承も行われていないことから、消滅の危機にある。

1.4 先行研究

伊仙方言に関する先行研究を年代順に列挙する。平山(1966)は分節音韻論・語アクセント・代名詞・動詞屈折の基礎的記述を行っている。崎村(1981)は語彙集・談話資料・語アクセント・動詞屈折の記述を行っている。Kato(2019)は音韻論・形態論・統語論・語彙集・談話資料の記述を行っている。

また、琉球諸語に関する総説の一部で伊仙方言が触れられているものとして、仲宗根(1961)と山田(1984)が挙げられる。

2 音韻論

2.1 分節音

表1、2、3に、音素の目録を示す。母音と半母音に関しては、これらの音素を弁別する素性を設定する根拠が現時点で不明であるが、便宜的に表の形で示す。

表1 母音の目録

i	i	u
e		o
ε	a	

母音は必ず 1 拍を担う。長母音および母音連続⁷は 2 つの音素の連続として分析する (e.g. [ta:] は /tā/ ではなく /taa/)。母音のうち /ε/ は機能負担が極めて低く、とりわけ長母音として出現する事が多い (e.g. *mεε* 「前」)。

表2 半母音の目録

j, jʔ, w, wʔ

半母音は母音と異なり拍を担わない。音節の頭に立つ場合 (e.g. /wa/, /ja/) と、音節頭子音と母音の間に立ち拗音拍を形成する場合がある (e.g. /kwa/, /kja/)。声門化半母音は語頭かつ音節頭にしか現れない。したがって、拗音拍も形成しない。

表3 子音の目録

	両唇	歯茎	軟口蓋	(声門)
閉鎖音	p, b	t, d, tʔ	k, g, kʔ	
摩擦音		s, z		h
破擦音		c		
鼻音	m, mʔ	n, nʔ		
流音		r		

声門化子音 (Cʔ) は声門化半母音同様語頭にしか立たない。これは、語頭の狭母音を含む 2 拍が通時的に声門化音へ変化したためだと考えられる (e.g. 「馬」 *mʔaa* < **uma*, 「9 つ」 *kʔuunuci* < **kokonotsu*)。/p/ は出現する環境が限られており、借用語 (e.g. *tenpura* 「揚げ物」) または、/h/ から始まる語が複合語の後部要素になった時の音交替 (e.g. *utji* 「打つ」 + *hugasi* 「穴を開ける」 > *uppugasi* 「強い動作で穴を開ける」) のみに現れる。これは、祖語の /*p/ が語頭では /h/ に変化し語中では消滅したため (e.g. 「南」 *hai* < **pae*)、複合語ではその痕跡が残っているものと考えられる。/r/ は、借用語を除き、語中にしか出現しない。

2.2 音節構造

音節の中で各分節音が占める位置を (1) のように定式化する。

(1) (C₁) (G) V₁ (V₂) (C₂)

μ μ μ

μ は拍を担う位置を示す。C₁ には、語頭において全ての子音が、語中において声門化子音 (Cʔ) 以外の全ての子音が立つ。G には半母音 /j/, /jʔ/, /w/, /wʔ/ が立つ。V₁ には全ての母音が立つ。C₂ には語中では /p/, /t/, /k/, /s/, /c/, /n/ が立ち、語末では /n/ のみが立つ。従って、音節末子音にはいわゆる促音と撥音のみが立つ。

内容語には最小語制限があり、音声実現の際には 2 拍以上⁸を担わなければならない。従って、基底で 1 拍の語が音声実現する際、拍数を確保するために母音を複製する (e.g. 「木」 /ki/ は [ki:])。ただし、複合語の要素にこの制限は適用されない (e.g. *kwa* 「桑」 + *ki* 「木」 > *kwaagi* 「桑の木」)。

2.3 名詞アクセント

伊仙方言は H と L のピッチが弁別的なアクセント言語であり、名詞アクセントについては三型の対立を持つと見られる。すなわち、各語彙項目が 3 つの音調型のうちいずれかを固有に持ち、それらの対立は名詞の拍が増減しようとも常に 3 種類のままである。以降、松森 (2012) に従って、各型を A, B, C 型と呼称する。

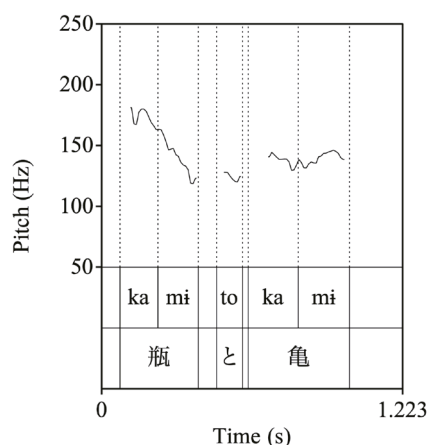
(2-4) に、2 拍名詞における各アクセント型同士の最小対立を例示する。

(2) A vs. B: /koo/ HH 「川」, /koo/ LH 「皮」

(3) A vs. C: /hasi/ HH 「橋」, /hasi/ HL 「箸」

(4) B vs. C: /kami/ LH 「亀」, /kami/ HL 「瓶」

ここから、全ての型が他の全ての型と対立を持つことが分かる。また、図1に、(4) に示した最小対立の F0 曲線を示す。C 型 HL の「瓶」は

図1 *kami=tu kami* 「瓶と亀」のF0曲線

ピッチの急激な下降が見られるのに対し、B型LHの「亀」では急激な下降も上昇も認められない(ただし、話者による聴覚印象では上昇があり、他の発話例では実際に上昇が認められることもある)。

ただし、各型の決定的な要素(例えば、東京方言における下がり目の位置のような)は現時点では不明である。

また、基底でn拍のC型名詞において、1拍目の母音が複製され、実現形でn+1拍になることがある(e.g. /maci/「松」が実現形では m^2aaci)。これは徳之島方言全般において話者間・話者内の揺れが激しい現象であるという(熊本県立大学・小川晋史准教授私信)。

3 語・語根の分類

3.1 品詞分類(語の分類)

伊仙方言における主要な品詞(word class)は、形態統語論的特徴から、動詞・名詞・連体詞・副詞・助詞の5種類を認める。

表4のような形式的特徴によって品詞を分類する。斜線で区切った箇所は、屈折形式や下位範疇によって性質が異なることを示す。

表4 品詞の分類

	動詞	名詞	連体詞	副詞	助詞
屈折する	+	-	+/-	-	-
節の述語になる	+	+	-	-	-
名詞を修飾する	+/-	(+)/-	+	-	-
格助詞が後続する	-	+	-	-	-
単独で現れず、節・句をホストに取る	-	-	-	-	+

以下、この表の示す特徴の具体的な形態統語論を各小節で扱う。

3.1.1 動詞

動詞は、義務的に否定・時制・法などの屈折接辞を伴い、節の述語として働く。「赤い」「高い」などの性質を表す語も形態論的観点から動詞に含まれる(vid. §4.1.2)。典型的には節の末尾に位置して述語になる(5a)が、屈折形式によっては名詞句を修飾する場合もある(5b)。

- (5) a. *maju=nu nizimi kam-tar-n*
 猫=NOM2 鼠 食べる-PST-ADN
 「猫が鼠を食べた」
- b. *wa=ga koow-tar-n*
 1SG.BAR=NOM1 食べる-PST-ADN
mun
 もの
 「私が食べたもの」

以下、表4に示した動詞の特徴である、屈折・述語性・名詞修飾機能を論じる。

第一に、動詞は屈折する。動詞は動詞語根からなる語(e.g. *koow-i*「食べる」)と形容語根から派生した語(e.g. *naga-mir-i*「長くする」)に二分されるが、いずれの場合でも必ず「語幹-屈折接辞」という構造をとる。

第二に、動詞は節の述語としてはたらく。動詞の屈折形式はその統語論的な振る舞いによって定動詞形・副動詞形・連体形・不定形に大きく分類される(各形式の詳細な形態統語論は

§4を参照)が、いずれの形も節の述語になることができる。(6)に各形式が述語としてはたらく例を示す(該当箇所太字)。

(6) a. 定動詞形、命令

kuri koow-i

これ 食べる-IMP

「これを食べろ」

b. 副動詞形、中止

koow-ti nenb-tar-n

食べる-SEQ 寝る-PST-ADN

「食べて(その後)寝た」

c. 連体形、過去

j²uu koow-tar-n

魚 食べる-PST-ADN

「魚を食べた」

d. 不定形

juu w²aa koow-i

よく 豚 食べる-INF

「頻繁に豚を食べる」

第三に、動詞は名詞修飾機能を有する。上述の4つの屈折形式のうち連体形のみが名詞修飾機能を有するが(vid. (5b))、それ以外の形式は有しない。したがって、表4では連体形の性質を+、それ以外の形式の性質を-で示した。

以上に動詞を品詞として分類する特徴を三点示した。

3.1.2 名詞

名詞それ自体は生産的な接辞付与や屈折がないという点で際立った形態論的特徴をもたないが、格助詞およびとりたて助詞に後続される点、節の述語になりうる点によって特徴づけられる。また、一部の代名詞は名詞修飾機能をもつ。

第一に、伊仙方言の名詞は、目的語である場合と節の述語になる場合(後述)を除き、ほぼ常に助詞に後続される。(7)に、*koosi*「食べさせる」の項のうち目的語以外が格助詞に後続されている例を示す。

(7) *taroo=ga ziroo=nin mun*

PN=NOM1 PN=DAT1 もの

koos-tar-n

食べさせる-PST-ADN

「太郎が次郎に飯を食わせた」

稀に、目的語でない動詞の項が無助詞で現れる場合があるが、これは§5.2.2で扱う。

第二に、名詞はそれのみで述語を形成しうる

(8)。名詞述語文については§5.3を参照。

(8) *an t²ju=ja kjooin*

あの 人=TOP 教員

「あの人は教員だ」

第三に、一部の代名詞はそれのみで名詞修飾ができる。代名詞のうち、一人称単数融合形 *waa*、一人称疑似複数 *wakkja*、二人称単数融合形は助詞を伴わず名詞修飾をする(9)。

(9) a. *waa hussju*

1SG.FUS 祖父

「私の祖父」

b. *wakkja azja*

1ASPL 父

「私などの父」

以上に名詞を品詞として分類する特徴を三点示した。

3.1.3 連体詞

連体詞は、形容語根が派生接辞をとり成立する語(10a)と指示連体詞(10b)に二分される。

(10) a. *siru-ka j²uu*

白-ADN 魚

「白い魚」

b. *kun j²uu*

この 魚

「この魚」

これらの語群は、形態論的には性質が異なるが、述語にならない点、単独で現れずに必ず非

修飾名詞(句)を伴う点から、単一の品詞として扱う。述語位置に出現すると非文になる例を(11)に示す⁹。

- (11) a. * *tjii=ja aka-ka*
 皿=TOP 赤-ADN
 「血は赤い」
- b. * *wan=ga koow-tar-n*
 1SG=NOM1 食べる-PST-ADN
sara=ja kun
 皿-TOP この
 「私が食べた皿(料理)はこれ」

また、動詞と名詞の小節で動詞の連体形と一部の代名詞が名詞修飾機能を持つことを示したにも関わらずそれらを連体詞としない理由は、述語にならない、必ず被修飾名詞を伴うという特徴をもたないためである。

3.1.4 副詞

積極的な形態統語論的特徴によって定義されない語類を副詞とする。副詞には、動詞修飾語(e.g. *teegee* 「とても、たくさん」)、擬音語・擬態語(e.g. *baa* 「えーん(幼児の泣く音)」)、間投詞(e.g. *tjoo* 「あーっ(遺憾の意を表する語)」)を含める。

3.1.5 助詞

助詞は、そのみで文中に現れず、必ず節・句をホストに取るという特徴を持つ。格助詞・とりたて助詞は主に句に接続し、接続助詞・文末助詞は主に節に接続する。

3.2 語根の分類

語根は、それがとりうる接辞や可能な形態法によって、名詞語根・動詞語根・形容語根・その他の語根に分類される。表5に、各語根分類の特徴を示す。

表5 語根分類

	名詞	動詞	形容	その他
単独で名詞になる	+	-	-	-
単独で語になる	+	-	-	+
態の接辞が接続しうる	-	+	-	-
名詞と複合する	+	-	+	-

名詞語根は、接辞添加なしに名詞としてはたらくことができる(e.g. *ki* 「木」)。動詞語根・形容詞語根からなる語も名詞としてはたらくことができるが、かならず特定の屈折形式であることが要求される。また、名詞と複合して複合名詞を作る(e.g. *kwa* 「桑」+ *ki* 「木」(名詞+名詞)> *kwaagi* 「桑の木」)

動詞語根は、主に動作や状態を表すが、単独で語になることはできず、必ず屈折接辞を要求する。また、動詞語根には受身 *-ar-*・使役 *-as-*などの態接辞が添加できる。動詞語根がそのまま名詞と複合することはできず、不定形の屈折接辞を必要とする。

形容詞語根は、主に性質や状態を表すが、単独で語になることはできず、必ず屈折接辞を要求する。動詞語根とは異なり、態接辞が添加できない。また、そのまま名詞と複合して複合語を形成しうる(e.g. *kjura* 「美しい」+ *kin* 「着物」(形容語根+名詞)> *kjuragin* 「美しい着物」)。

4 動詞

4.1 動詞の内部構造

伊仙方言の動詞は、動詞語根からなるものと形容語根からなるものに二分される。いずれも「語幹+屈折接辞」という構造をもつ。語幹は「語幹核+(派生接辞)」という構造をもち、語幹核は単純語根もしくは複合語からなる。

4.1.1 動詞語根からなる動詞

まず、動詞語根からなる語の最大の連辞的構造を図2に、全ての位置が埋まった動詞の例を(12)に示す。

語根	-as	-ar	-tur	-tar	-屈折接辞
	使役	受身・可能	継続	過去	
			-jur		
			無標		

図2 動詞語根からなる動詞の内部構造

(12) *koow-as-ar-tur-tar-n*

食べる-POT-PASS-PROG-PST-ADN

「食べさせられていた」

語根に近い位置に二つの態接辞が位置する。これら二つは共起可能である。この次に相・時制接辞が位置する。図2で垂直方向に示したように、*-tur-* と *-jur-* 及び *-tar-* と *-jur-* は共起しない。*-jur-* は特定の屈折形式が義務的に要求するが固有の意味機能を持たず、いわば語幹拡張接辞として機能する(後述)。屈折接辞の位置には、表6に示す形式が範列的に位置する。

表6 動詞屈折形式の一覧

分類	機能・名称	接辞	<i>kak-</i> 「書く」の形式
定動詞形	命令 1	-i	<i>kaki</i>
定動詞形	命令 2	-ee	<i>kakee</i>
定動詞形	禁止	-una	<i>kakuna</i>
定動詞形	勧誘	-a	<i>kaka</i>
定動詞形	意志	-oo	<i>kakoo</i>
副動詞形	中止	-ti	<i>katji</i>
副動詞形	否定条件	-ama	<i>kakama</i>
副動詞形	並置	-taari	<i>katjaari</i>
連体形	肯定	-n	<i>kakjun (kak-jur-n)</i>
連体形	否定	-an	<i>kakan</i>
連体形	否定過去	<i>adatan</i>	<i>kakadatan</i>
不定形	不定	-i	<i>kaki</i>

§3で述べた通り、全ての屈折形式はその統語論的ふるまいによって定動詞形・副動詞形・連体形・不定形の4つに分類される。表7に各形式の特徴を示す。

表7 動詞屈折形式の統語論的ふるまいによる四分類

	定動詞	副動詞	連体	不定
主節の述語になる	+	+/-	+	+
副詞節を形成する	-	+	-	+
名詞修飾をする	-	-	+	+
名詞としてはたらく	-	-	-	+

定動詞は主節の述語になるが、それ以外の機能は持たない。つまり、文終止の機能しか持たない。

副動詞のうち中止形のみ主節の述語としてもはたらし、過去時制を標示する。それ以外の副動詞二形式は副詞節を形成するのみである。また、副動詞中止形は定動詞と同一節内に出現することができるが、それは定動詞が助動詞である場合である(助動詞については本節で後述)。

連体形は文終止と名詞修飾の機能を担う。派生接辞 *-jur-* は限られた環境でのみ義務的に出現すると上で述べたが、そのうちの一つは動詞が連体肯定形の屈折形式を取る場合である。表6の中で動詞語根 *kak-* の連体肯定形の形式を *kak-jur-n* と示した通り、*-n* は語根と態接辞に直接接続することができず、必ず相・時制接辞のいずれかによって派生された語幹に接続しなければならない。したがって、*-tur-*、*-tar-* のどちらも取らない場合、必ず *-jur-* が要求される。

不定形は文終止、節連鎖、名詞修飾、名詞の機能をもつ。動詞語根から複合語を形成する場合、必ずこの形式を取らなければならない(e.g. *cuk-i* 「搗く-不定」+ *kumi* 「米」> *cukigumi* 「精米した米」)。また、派生接辞 *-jur-* が出現するもう一つの環境が不定形である。不定形接辞は受身可能接辞 *-ar-* からなる語幹に直接接続することができず、必ず相・時制接辞のいずれかによって派生された語幹に接続しなければならない。したがって、*-tur-*、*-tar-* のどちらも取らない場合、必ず *-jur-* が要求される。

4.1.2 形容語根からなる動詞

本研究で形容語根と呼称するものは、他の研究ではPC語根と称されることもあるが(e.g. 井手口 2015)、性質などの概念を含む語根である。形容語根から動詞を形成する場合、形容語根に動詞語幹派生接辞と動詞屈折接辞(表6)を添加する方法と、形容語根に専用の屈折形式 *-ku* を添加する方法がある。

まず、動詞語幹を派生させる形態法について述べる。動詞語幹派生接辞には、二項動詞語幹を派生する *-mir-* と、一項動詞語幹を派生する *-har-* の二種類のみが存在する。前者は「Obj を Adj の状態にする」を意味する語幹(e.g. *naga-mir-i* 「長くする」)で、後者は「Sbj は Adj の状態である」を意味する語幹(e.g. *naga-har-i* 「長い」)である。形容語根からなる動詞の基本的な内部構造を図3に図示し、(13)に全ての位置が埋まった例を示す。

語根	<i>-mir-</i>	-態・相・時制派生接辞	-屈折接辞
	<i>-har-</i>		

図3 形容語根からなる動詞の内部構造

(13) *naga-mir-ar-tur-tar-n*

長い-VBLZ-PASS-PROG-PST-ADN

「長くされていた(道具が長く伸ばす加工を受けている途中だった)」

*-mir-*によって形成された語幹は、(13)に示したとおり、形態論的には動詞語幹からなる語幹(vid. §4.1.1)と概ね同じくふるまう。一方で、*-har-*によって形成された語幹は、接辞の選択制限の点でその他の語幹とは異なる。まず、表6の屈折形式のうち、*-har-*からなる語幹がとりうるのは、定動詞意志形 *-oo*、連体形肯定 *-n*、不定形 *-i*のみである。否定形接辞をとることができないため、形容語根からなる動詞を否定する場合、後述の *-ku* の形式を取る必要がある。

次に、形容語根に専用の屈折形式 *-ku* を添加する形態法について述べる。この屈折形式の前

には派生接辞を添加できず、常に「語幹核-*ku*」の構造を取る。統語的には動詞語幹からなる動詞の副動詞中止形と類似したふるまいをみせる。すなわち、従属節の述語になって節連鎖を形成し、「本動詞+助動詞」の構造において本動詞の役割を果たす(e.g. *mekkjarō-ku sjun* 「真っ黄色にする」)。ただし、主節の述語としてはたらない。この形式に固有の特徴は、否定助動詞 *neer-* を取ることができる点である。従って、形容語根からなる動詞を否定する場合、*-ku* で屈折し、助動詞 *neer-* を後部を取る必要がある(e.g. *taa-ku neer-an* 「高くない」)。

4.2 助動詞

形態統語論的観点からは、動詞は本動詞と助動詞に二分される。本動詞はそれのみで出現し、否定・時制・法などの接辞を取りうるのに対し(e.g. *koow-tar-n* 「食べた」)、助動詞は常に本動詞と共に出現し、本動詞の代わりに否定・時制・法などの接辞を取り、相などを標示する(e.g. *koow-ti simow-ti* 「食べてしまった」)。

助動詞には本動詞の副動詞中止形と不定形両方に接続するもの(14a, b)と副動詞中止形にしな

(14) a. *num-ti taboor-i*

飲む-SEQ 給わる-IMP

「お飲みください」

b. *num-i taboor-i*

飲む-INF 給わる-IMP

「お飲みください」

c. *koow-ti simow-ti*

食べる-SEQ しまう-SEQ

「食べてしまった」

d. **koow-i simow-ti*

食べる-INF しまう-SEQ

「食べてしまった」

助動詞の文法化の度合い(「本動詞らしさ」を失った度合い)は語彙ごとに異なる。例えば、本

動詞としての機能を失って助動詞としてしか用いられないもの (e.g. *taboor-* 「～してくださる」)、本動詞としての用法を持つが助動詞としての用法とはふるまいが異なるものなどがある。後者の例としては *ar-* が挙げられる。本動詞の *ar-* は無生物主語の存在動詞であって (15a)、有生主語に用いると非文になる (15b) が、結果状態を表す助動詞として用いられた場合には有生主語をとりうる (15b)。

- (15) a. *ii cinba=nu*
 良い ガジュマル =NOM2
ar-n
 ある-ADN
 「立派なガジュマルの木が生えている」
- b. * *taroo=ga uma=nan*
 PN=NOM1 そこ =LOC1
ar-n
 ある-ADN
 「太郎がそこにある」
- c. *ama=ga uban cukur-ti*
 母 =NOM1 ご飯 作る-SEQ
ar-n
 ある-ADN
 「母がご飯を作っている」

5 名詞

名詞は屈折せず、非義務的な派生接辞をいくつか後続しうる。名詞の構造を定式化したものを (16) に示す。括弧内は非義務的な要素である。

- (16) 語根/複合名詞-(指大辞/指小辞)-(複数)

指大辞には、尊属の親族名称が用いられる。指大辞を用いるために実際に指示対象と血縁関係にある必要はない。また、*-ganasi* という形式も用いられ、親族名称や天体・自然現象に添

加される。指小辞には *-gwa* という形式があり、指示対象への愛着もしくは聞き手への敬意を示す。*-ganasi* も *-gwa* も生産的な接辞ではなく、語彙的に添加可能かどうか異なる。

複数接辞には疑似複数 *-nkja* と結合複数 *-taa* が存在する。

5.1 代名詞

伊仙方言の代名詞は、人称 (一・二)、数 (単数・複数・疑似複数・双数)、尊・非尊で屈折する。三人称代名詞専用の形式は存在せず、三人称名詞への言及には指示代名詞を用いる。単数には母音が複製され一拍長い形が存在し、これを融合形と呼称する。一人称単数にのみハダカ形という形式があり、助詞の選択制限がある。融合形・ハダカ形の形態論的特徴は後述する。尊・非尊による屈折は二人称にのみ存在する。琉球諸語でしばしば見られる除外・包括の区別は存在しない。まず、表8 に代名詞の体系を示す。

表8 代名詞の体系

	一人称		二人称	
	無標	ハダカ形	尊	非尊
単数非融合形	<i>wan</i>	<i>wa</i>	<i>uri</i>	<i>ura</i>
単数融合形	<i>waa</i>	-	-	<i>uraa</i>
結合複数	-	-	<i>uri-taa</i>	<i>ura-taa</i>
疑似複数	<i>wakkja / waakja</i>	-	<i>ukkja</i>	<i>ukkja</i>
双数	<i>wanten / wattari</i>	-	<i>urinten</i>	<i>uranten</i>

まず、一人称単数のみに見られるハダカ形 *wa* は、極めて強い助詞の選択制限を有し、主格 *=ga* のみがこの形式に接続することができる。主格 *=ga* は動詞句の主語を標示する機能と名詞句を修飾する名詞句を標示する機能があるが (vid. §5.2)、主語標示機能を担う場合 *wan* を選択し、名詞修飾機能を担う場合 *wa* を選択する。また、これ以外のほぼ全ての代名詞は助詞の選択制限を持たない (ただし、§5.2で後述するように、名詞句の有生性による格助詞の制限がかかることはある)。次に、単数融合形 *waa*, *uraa*

が非融合無標形と異なるのは、助詞を伴わずに単独で名詞修飾機能を有する点と、*=ga* 後続による名詞修飾が不可能な点である。(17)に、各形式の名詞修飾機能の違いを示す(ただし、*naa*は「名前」を意味し、それぞれ「私の名前」もしくは「あんたの名前」の意)。

- (17) a. **wan naa*
 b. **wan=ga naa*
 c. **wa naa*
 d. *wa=ga naa*
 e. **waa=ga naa*
 f. *waa naa*
 g. **ura naa*
 h. *ura=ga naa*
 i. *uraa naa*
 j. **uraa=ga naa*

5.2 格

伊仙方言の名詞句は、名詞句に後接語を接続することで標示される。ただし、例外的に、典型的な他動詞目的語は無標示である。主格標示のある名詞句と無標示の他動詞目的語が出現する例を(18)に示す。

- (18) *taroo=ga cukue kunzas-ti*
 PN=NOM1 机 壊す-SEQ
 「太郎が机を壊した」

格助詞の一覧は以下の通り: 主格1=*ga*、主格2=*nu*、与格1=*nin*、与格2=*n*、与格3=*nen*、処格1=*nan*、処格2=*nanti*、方向格=*ka*、具格=*si*、奪格=*kara*, *=kaara*, *=kaa*。

5.2.1 主格の交替

伊仙方言の主格には *=ga* と *=nu* の二形式が存在する。前者を主格1、後者を主格2と呼称する。これらの形式は、動詞の主語を標示する機能と名詞を修飾する名詞を標示する機能がある。いずれの機能としてはたらく場合であっても同一の音形を持つことから、主格と属格に区

別せず、常に主格として扱う。(19)に、主格1と主格2が主語と修飾語の標示を行っている例を示す。

- (19) a. *kuma=ja wa=ga*
 ここ =TOP 1SG.BAR=NOM1
uttu=ga tjootjoo
 弟 =NOM1 町長
 「ここは私の弟が町長だ」
 b. *maju=nu mii=nu huttee-ku*
 猫 =NOM2 目 =NOM2 大きい-SEQ
nar-tur-i
 なる-PROG-INF
 「猫の目が大きくなっている」

それぞれ、*wa=ga*, *maju=nu* が修飾語を標示し、*uttu=ga*, *mii=nu* が主語を標示している。

主格1と主格2のどちらを選択するかは、その機能と主語名詞句の有生性によって決定される。表9にどちらが選択されるかを示す。表中のG, Nはそれぞれ *=ga*, *=nu* を意味する。

表9 有生性と主格交替

	代名詞	ヒト固有名詞	ヒト名詞	非ヒト名詞
主語標示	G	G	G/N	N
名詞修飾	G	G/N	G/N	N

日琉諸語のうち名詞句の尊卑性や呼称可能性が格交替に関わる言語もあるが(vid. Iwasaki 2015)、伊仙方言では特に影響を及ぼさない。

5.2.2 主要項の配列

伊仙方言の主要項の格配列は、自動詞主語と他動詞主語に有形標示を行うが他動詞主語に何も標示しない、有標主格対格型である。Comrie (1978) のような主要項の有形標示の動機を項同士の文法関係の相互識別に帰する立場からすると、有標主格対格型は経済性の制約に反し、類型論的には稀な型であると予測される。

また、非意思的な自動詞の主語が無標示になる場合がある(20)。これは天候・存在・出現を

表す文で見られる。

- (20) *kinjuu uu+ami hur-tar-n*
 昨日 大+雨 降る-PST-ADN
 「昨日大雨が降った」

5.3 名詞述語文

名詞句を中心に形成される文を名詞述語文と呼称する。

非過去・肯定の場合、名詞句は単独で名詞述部を形成する (21)。

- (21) *an tʰju=ja kjooiin*
 あの 人=TOP 教員
 「あの人は教員だ」

それ以外の場合、極性と時制をコピュラが担って名詞述語を形成する：肯定・過去 *jar-* (22a)、否定 *ar-* (22b)。

- (22) a. *wan=ja kjooiin jar-tar-n*
 1SG=TOP 教員 COP-PST-ADN
 「私は教員だった」
 b. *wan=ja kjooiin ar-an*
 1SG=TOP 教員 COP-NEG
 「私は教員でない」

6 その他の語類

6.1 指示詞

指示詞は複数の品詞にまたがる語類である。指示詞には近称、中称、遠称の三系列が存在する。表10に指示詞の体系を示す。

表10 指示詞の体系

機能	形式		
	近称	中称	遠称
指示代名詞	<i>kuri</i>	<i>uri</i>	<i>ari</i>
場所名詞	<i>kuma</i>	<i>uma</i>	<i>ama</i>
指示連体詞	<i>kun</i>	<i>un</i>	<i>an</i>
様態連体詞	<i>kasingan</i>	-	-
場所副詞	-	<i>ugan</i>	<i>kugan</i>
様態副詞	<i>kassi</i>	<i>ugwasi</i>	<i>agasi</i>

指示代名詞は三人称代名詞の役割を果たす。指示代名詞が人間名詞を指示する場合複数接辞は *-taa* を取り、非人間名詞を指示する場合 *-nkja* を取る。

6.2 疑問詞

指示詞は複数の品詞にまたがる語類である。表11に疑問詞の体系を示す。

表11 疑問詞の体系

機能	品詞	形式
人	名詞	<i>taru, tan</i>
物	名詞	<i>nuu</i>
選択疑問	名詞	<i>din</i>
場所	名詞	<i>daa</i>
時	名詞	<i>ici</i>
量	名詞、副詞	<i>ikuci</i>
様態	副詞	<i>ikjasi</i>

疑問詞は、疑問詞疑問文において疑問の焦点を示す (23a) ほか、否定文において不定名詞を示し (23b)、非否定文において不定名詞を示す (23c)。

- (23) a. *ura naa-gwa nuu=tji=ga*
 2SG 名前-DIM 何=QUOT=Q

「あんたの名はなんというか」

b. *nuu=ma san*

何 = も する.NEG

「何もしない」

c. *uma=nan nuu=ka ar-n*

そこ =LOC1 何 = か ある-ADN

「そこに何かある」

7 統語論

7.1 語順

二項動詞の場合、語順は SOV が最もよく見られる。ただし、談話では、文脈から推測できる場合 S が欠けることがしばしばある。副詞や斜格項がある場合、ほぼ必ず O より前に位置する。すなわち、V が文末に位置し、O が V の直前に位置するという極めて強い傾向がある。修飾関係にある語は常に「修飾-被修飾」の順であり、連体詞-名詞、動詞-名詞、所有名詞-被所有名詞などが挙げられる。

7.2 結合価と格配列の操作

伊仙方言の動詞には一項動詞から三項動詞までが存在する。一項動詞と二項動詞、二項動詞と三項動詞が語彙的に対応することもある (e.g. 一項動詞 *cuk-*「つく」と二項動詞 *cukir-*「つける」、二項動詞 *koow-*「食べる」と三項動詞 *koos-*「食べさせる」)。結合価の操作は語基への接辞添加による態の転換と助動詞によって行われる。

7.2.1 態転換

態を転換する派生接辞には、使役 *-as-* と受身・可能 *-ar-* が存在する。

使役接辞の添加は、元の動作主の与格への降格と、新たな使役者主語項の増加を引き起こす (24)。ただし、元の動詞が語彙的に三項動詞だった場合、項の増減は起こらずに主格項と与格項の転換のみが起こる (25)。

(24) a. *ziroo=ga saki num-i*

PN=NOM1 酒 飲む-INF

動作主 目的語 述部

「次郎が酒を飲む」

b. *taroo=ga ziroo=nin saki*

PN=NOM1 PN=DAT1 酒

使役者 動作主 目的語

num-as-i

飲む-CAUS-INF

述部

「太郎が次郎に酒を飲ませる」

(25) a. *katoo-san=ga wan=nen*

PN-AUG=NOM1 1SG=DAT3

sima+kutji narow-i

島 + 口 習う-INF

「加藤さんが私に島口を習う」

b. *wan=ga katoo-san=nen*

1SG=NOM1 PN-AUG=DAT3

sima+kutji naraw-as-i

島 + 口 習う-CAUS-INF

「私が加藤さんに島口を習わせる (教える)」

受身接辞は、三項動詞に添加された場合、元の使役者項の斜格への降格と、元の動作主項の主格への昇格を起こす (26)。二項動詞に添加された場合、元の動作主項の目的語への降格と、元の被動者の主格への昇格を起こす (27)。一項動詞への添加も可能だが、その場合受け身ではなく可能の解釈になる (28)。

(26) a. *ziroo=ga taroo=nin saki*

PN=NOM1 PN=DAT1 酒

num-as-tar-n

飲む-CAUS-PST-ADN

「次郎が太郎に酒を飲ませた」

- b. *taroo=ga ziroo=nin saki*
 PN=NOM1 PN=DAT1 酒
num-as-ar-tar-n
 飲む-CAUS-PASS-PST-ADN
 「太郎が次郎に酒を飲ませられた」
- (27) a. *uttu=ga taroo ut-tar-n*
 弟=NOM1 PN 殴る-PST-ADN
 「弟が太郎を殴った」
- b. *taroo=ga uttu=nén*
 PN=NOM1 弟=DAT3
ut-ar-tar-n
 殴る-PASS-PST-ADN
 「太郎が弟に殴られた」
- (28) a. *wan=ja isjugar-ti*
 1SG=TOP 急ぐ-SEQ
hasir-ar-an
 走る-POT-NEG
 「私は急いで(速く)走ることができない」

7.2.2 助動詞

助動詞のうち、*morow*-「もらう」、*neer*-「あげる」、*kurir*-「くれる」は、結合価を増やし、格配列を変更する機能を持つ。

- (29) a. *taroo=ga ziroo=nin suk-an*
 PN=NOM1 PN=DAT1 好き-NEG
mun koow-ti morow-ti
 もの 食べる-SEQ もらう-SEQ
 「太郎は次郎に嫌いなものを食べてもらった」
- b. *wan=ja uttu=nin hun jum-ti*
 1SG-TOP 弟=DAT1 本 読む-SEQ
neer-tar-n
 あげる-PST-ADN
 「私は弟に本を読んであげた」

- c. *azja=ga wan=nin*
 父=NOM1 私=DAT1
matabja+nur-i naraw-as-ti
 竹馬+乗る-INF 習う-CAUS-SEQ
kurir-tar-n
 くれる-PST-ADN
 「父が私に竹馬乗りを教えてくれた」

7.3 従属節

従属節は補文節、副詞節、関係節に分類される。

補文節は引用助詞 *=tji* によって形成される(30)。引用助詞はあらゆる品詞の語、あらゆる種類の節・句・文を取る。ただし、「～するの(見た)」のようないわゆる準体助詞(文法化が進行した形式名詞)によって形成される節は、ここでは関係節とみなす。

- (30) *ugan ik-ama*
 そちらへ 行く-NCND
sim-an=tji iw-ti
 済む-NEG=QUOT 言う-SEQ
 「『そちらへ行かなければならない』と言った」

(30)において、「そちらへ行かなければならない」という発話全体を *=tji* によって補文節化し、*iw-ti*「言った」の補語としている。

関係節は動詞の連体形によって形成される(31)。

- (31) *wa=ga kak-tar-n zii*
 1SG.BAR=NOM1 書く-PST-ADN 字
 「私が書いた字」

副詞節は、動詞の副動詞形と不定形が単独で形成する(32a)。また、名詞述語、動詞の定動詞形、連体形または中止形に接続助詞を接続して形成する(32b)。

- (32) a. *kii=kaa oow-ti kiga*
 木=ABL 倒れる-SEQ 怪我
s-tar-n
 する-PST-ADN
 「木から倒れ落ちて怪我をした」
- b. *ura=ga oow-ti=ka*
 2SG=NOM1 倒れる-SEQ=COND
tan=ga nj-jur-n=ga=jaa
 誰=NOM1 見る-UMRK=ADN=Q=Q
 「あんたが倒れたら誰が(面倒を)見るのか」

(32a) について、*oow-ti* が動詞の副動詞形であり、副詞節を形成している。(32b) について、*oow-ti* が動詞の中止形であり、=*ka* によって条件副詞節を形成している。

8 文の機能

8.1 極性

文の極性は述部で標示される。動詞語根からなる動詞の場合は否定屈折形式によって標示される (33a) が、助動詞を伴う場合は助動詞の屈折形式に標示される (33b)。形容語根から派生した動詞の場合は助動詞 *neer-* に (33c)、名詞述語の場合は助動詞 *ar-* に標示される (33d)。

- (33) a. *num-an*
 飲む-NEG
 「飲まない」
- b. *num-i=ja s-an*
 飲む-INF=TOP する-NEG
 「飲みはしない」
- c. *taa-ku neer-an*
 高い-SEQ ない-NEG
 「高くない」
- d. *an t²ju=ja sinsii=ja ar-an*
 あの 人=TOP 先生=TOP

8.2 疑問

極性疑問文であることは述部に文末助詞 =*ga*, =*jaa* のどちらか一方あるいは両方を接続することによって示される。疑問詞疑問文は疑問詞が存在すること自体が疑問文であることを示すため、疑問の文末助詞を欠いてもよいが、多くの場合極性疑問文と同様に文末助詞が述部に接続する。疑問詞は以下の通り: *taru*, *tan* 「誰」、*nuu* 「何」、*din* 「どの、どれ」、*daa* 「どこ」、*ici* 「いつ」、*ikuci* 「いくつ」、*ikjasi* 「どのように、なぜ」。極性疑問文も疑問詞疑問文も語順は平叙文と変わらず、疑問詞疑問文の場合疑問詞が対応する平叙文の句と同じ箇所に位置する。(34a) に極性疑問文、(34b) に疑問詞疑問文を例示する。

- (34) a. *ura=ga taroo*
 2SG=NOM1 PN
nak-as-tar-n=ga
 泣く-CAUS-PST-ADN=Q
 「お前が太郎を泣かせたのか？」
- b. *taru=ga taroo*
 誰=NOM1 PN
nak-as-tar-n=ga=jaa
 泣く-CAUS-PST-ADN=Q=Q
 「誰が太郎を泣かせたのか？」

また、疑問詞は平叙文における不定語としても機能する (35)。

- (35) *taru=ga=daara nj-tar-n*
 誰=Q= かどうか 見る-PST-ADN
 「誰かを見た」

8.3 相

相の標示は派生接辞 (36a) と助動詞 (36b) によって行われる。

- (36) a. *turi=nu tub-tur-i*
 鳥 =NOM2 飛ぶ-PROG-INF
 「鳥が飛んでいる」
- b. *sinbun=ga kazi=si*
 新聞 =NOM1 風-INS
tub-as-ar-ti ar-i
 飛ぶ-CAUS-PASS-SEQ ある-INF
 「新聞が風で飛ばされてしまった (直訳: 新聞が風で飛ばされてある)」

派生接辞のうち相の標示を担うのは *-tur-* のみであり、相標示における機能負担は助動詞のほうが大きい。相標示を担う助動詞は以下の通り: *ar-* 「～してある」、*simow-* 「～てしまう」、*ku-* 「～て来る」、*iz-* 「～て行く」。

8.4 法

法 (mood, modality) は動詞の定動詞屈折形式 (vid. §4.1.1) と文末助詞のどちらか一方あるいは両方によって標示される。文末助詞のうち、特定の屈折形式を要求するものがある: 命令形、=*hee* 「～(しろ) よ」; 勧誘形、=*di* 「～(しまし) よう) ね」、=*ee* 「～(しまし) よう) ね」; 連体形、=*bεε* 「らしい」、=*daa* 「だよ」、=*doo* 「だよ」、=*tjo* 「でしょう」。その他、頻度の高い形式を列挙する: =*jaa* 「ね、か?」、=*ga* 「か?」、=*saja* 「でしょう」、=*jee* 「でしょう」、=*ii* 「ですか?」。

注

¹本研究は、筆者の修士論文である Kato (2019) に、新たに入手した言語資料に基づく分析を加え、改訂したものである。

²本研究で用いる言語資料は、特に断りの無い限り、徳之島伊仙町の面縄・検福・東浜集落に住む 70 歳以上の協力者への面接調査・談話調査によって得たものである。調査に協力してくださった方に改めてお礼を申し上げる。ただし、本論における誤りは全て筆者の責任である。

³本研究は、JSPS 特別研究員奨励費 JP19J20370 および 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の助成を受けている。

⁴例文は、一段目に形態素分析を行った後の音素表示を、二段目に各形態素のグロスを、三段目に和訳を表示する。特に必要のある場合、三段目に追加の情報 (文法関係など) を示し、四段目に和訳を付す。

⁵特に兵庫県へ出稼ぎへ出た住民が多いため。

⁶鹿児島本土へ進学・就職する住民が多く、またテレビ・ラジオなどのメディアも鹿児島県の影響が強い。

⁷形態素境界を挟まない母音の連続の一覧は以下の通り: aa, ai, au, ao, ii, ui, uu, ui, ee, oi, oo, ii, εε。

⁸拍数の数え上げには後接語を含まない。

⁹形容語根連体詞の屈折接辞-*ka* は、九州方言に見られる形容詞終止連体形のいわゆる「カ語尾」からの借用と考えられるが、九州方言のカ語尾は伊仙方言の-*ka* と異なり、節の述部に立つことができる。

参考文献

- Comrie, Bernard (1978) Ergativity. In: Lehmann, Winfred P. ed. *Syntactic typology*. The Harvester Press.
- 平山輝男 (1966) 『琉球方言の総合的研究』明治書院。
- 井手口将仁 (2015) 「北琉球語徳之島井之川方言の文法概説」修士論文, 九州大学。
- Iwasaki, Shoichi (2015) Animacy and differential subject marking in the Ikema dialect of Miyako. *Studies in Language*, 39(3): 754-778.
- Kato, Kanji (2019) A sketch grammar of the Isen dialect of Tokunoshima, Amami. Master's thesis, Tokyo University of Foreign Studies Graduate School.
- 松森晶子 (2012) 「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』, 16(1): 30-40.
- 中本正智 (1984) 「南島方言の概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 10 沖縄・奄美地方の方言』, 1-79. 国書刊行会。
- 仲宗根政善 (1961) 「琉球方言概説」東条操 (編) 『方言学講座 4』, 20-43. 東京出版。
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archaeology of the Ryukyu islands. In: Heinrich,

Patrick, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages : history, structure, and use*. 11 of Handbooks of Japanese language and linguistics. 13-37. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

崎村弘文 (1981) 「徳之島の方言-1-伊仙町目手久方言の実態」『鹿児島大学文科報告第1分冊哲学・倫理学・心理学・国文学・漢文学篇』, 17: p1-19.

崎村弘文 (1983) 「徳之島の方言-3-徳之島町亀津方言の実態」『鹿児島大学文科報告第1分冊哲学・倫理学・心理学・国文学・漢文学篇』, 19: 1-17.

上村幸雄 (1997) 「琉球列島の言語 0) 総説」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『日本列島の言語』, 311-354. 三省堂.

山田実 (1984) 「奄美諸島 (属島) の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 10 沖縄・奄美地方の方言』, 151-167. 国書刊行会.